

オディロン・ルドン作版画集《聖アントワーヌの誘惑》の隠喩的構成と換喩的構成

中村泰士 (成城大学)

19世紀象徴主義絵画の中でも、オディロン・ルドンのリトグラフ作品は、文学作品との関係性がしばしば論じられる。ルドンの文学作品の視覚化手法については、フレッド・リーマンが1994-1995年のルドン展(シカゴ/他)のカタログの「イメージとテキスト」の節で「多義的な隠喩」と評しているように、その特徴として、「多義性」と「隠喩」が従来から指摘されて来た。一方ルドン自身も彼の手記の中で、レミ・ド・グールモンの評を引用して、自身の作品の特徴を「一種の隠喩」と述べている。しかしながらレトリックの側面から見ると「隠喩」のほかにも大きな対概念として「換喩」もある。そしてルドンの手記の中では、彼の暗示的芸術は「近接した様々な要素の組み合わせ、入れ替えられたあるいは変形された形態の組み合わせ」によって獲得されたものとされており、そこには一部換喩的操作とも言える側面も見てとれる。このことからしばしば隠喩的と称されるルドンの芸術手法については、より詳しく検証してみる必要がある。ルドンの視覚化手法を探るにあたっては、複数の版画を扱う版画集を対象として、版画間のつながりの様態を連想性の観点から検討することが一つの方法として考えられる。物語の進展の類型については、ロマーン・ヤーコブソンが、連辞における類似性と隣接性によって、隠喩型と換喩型の二つの基本的軸を提示したが、この二類型は図版間の連想傾向を検討する上で有効であると思われる。本発表では、3度にわたって制作されたルドンの代表的版画集、《聖アントワーヌの誘惑》第1集～第3集を例にとり、図版の連鎖における類似性と隣接性を分析することにより、ルドンの視覚化手法の傾向を探るものである。

《聖アントワーヌの誘惑》第1集は、悪魔の登場に始まり、神々、怪物たちの出現、最後にキリストの現れで終了する物語である。そこにはエンノイアによる変身、あるいは悪魔による変身の展開を読み取ることが可能である。そして列挙される怪物たちの間には擬人像としての類似性や円形の体つきをしているといった形象上の相似などを認めることができる。次に、神々や怪物の羅列で構成される第2集では、怪物達は蛇体を持つという類似性を共有し、その実体が悪魔であることを窺わせる。第1集、第2集は、総じて類似的連想傾向の強い作品であると言える。それに対し、アントワーヌの登場で始まり、キリストの出現で終わる第3集では、類似的連想は後半部の神々の羅列などに限られ、反対に、空間的隣接性(洞のある樹木とそれに続く洞の大きさのエンノイアの横顔が、彼女が洞に住んでいたことを連想させる)や因果的隣接性(牢獄の場面に続く無人の荒野の風景が殉教者たちの処刑されたことをあらわす)による連鎖が随所に見られる。第3集では、他の2集に比べ隣接的連想傾向がより強く表れ、視覚化手法の変化が見られる。